宮森健次

告発状

退職日が近づいてくると、銀行や保険会社が訪ねてくるのは、先輩教員たちを見ていて年中行事のように思っていた。煩わしかろうなと思っていたのだが、自分の番になってみるとそうでもない。もっともコロナの影響か、自分の不徳のいたすところか、訪ねてくる人もそれほどないし、たいていは資料の入った封筒を渡してそそくさと帰って行く。営業の人たちにとってもこの時期の重荷なのかもしれないと思うと、わざわざ来てもらったのだから冗談の一つでも言ってリラックスしてもらおうかなどと考える。

ポツリポツリとセールスに対するようになったころ、匿名の封書が学校宛てに届いた。

「怪しいです。」

事務員さんにそう手渡されて、またクレームかと警戒して読み始めると、先輩退職教員からの苦渋に満ちた失敗談だった。裏表印刷のコピーで添え書きもないので、相当数送ったにちがいない。中身は、金融機関のセールストークに乗せられるまま購入した商品の値が下がって大損したというものだった。事細かに、保険名、購入価格、売却額、損失額すべて記載してある。加えて、営業マンの説明要旨、説明書の記載内容などを挙げ、いかにうまい話に仕立て上げられていて、リスクについては注意を向けないように仕向けられていたか詳述してあり、冷静を装ってはあっても激した感情が伝わってくる。大手金融機関であろうと、顧客の利益よりも自分たちの手数料収入を優先し、欺しにかかるのだと、吐き捨てるように書かれていた。相談も抗議もしたようだが、合法的な取引なのだから相手にされるわけもない。怒りの持って行き場を失った当人の思いついたのが、告発状を各校退職予定者宛に郵送することだったのである。どれだけの学校が受け取っているものかわからないが、市内に限ってもけっこうな経費がかかるだろうに、それを無駄とは思えないらしい。

「私たち教職員は、資産運用など学ぶ機会もないまま退職を迎えます。欺されて大切な退職金を失わないようご注意ください。」

あえて義憤に昇華して、勇気がいっただろう行為に及んだこと、同職者として人物像が浮かんでくるだけに何やら痛々しい。

「早く事の大いにあやまるを知らば　恨むらくは　十年読まざるを」

蘇軾の詩にある、十年読書できなくなるあやまりがこの匿名の手紙で軽減するか、はたまた無知と独善に気づいて延長することになるか、可能ならば先輩の後日談に学びたく思う。

夕焼け通信1291号　2021.1.18

〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-B402
miyaken@me.com　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/
編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その２）37

木幡智恵美

出産（4）

寛大と実歩の夜中の活躍にしばしば起こされはしたものの、五時にばちっと目が覚めた。子どもたちを見ると、何とか布団の中にいる。そして、寛大の目が開いているのが見えた。「まだ早いから、もう少し寝ようね」と言ってしばらく横になっていたが、やはり寛大の目は開いたままだ。環境が変わり、緊張しているのだろうか。「ババは、朝ご飯の用意をするから、迎えに来るまで布団の中におってよ」と言って台所に降りる。

今朝の献立はサラダにウインナーと牛乳、あとは焼くだけのチーズトーストだ。準備を終えて二階へ迎えに行くと、実歩も起きていて、二人布団の上に並んで座っていた。寛大は一人で、実歩は私に抱っこされて台所に降り、順番にトイレに連れて行ってからテーブルに着かせる。私は朝食をかきこみ、二人が夫や息子と朝食を摂っている間、義母の部屋に行き、リモコンでベッドの上体を起こし、車椅子に乗せてトイレに連れて行く。着替えをさせて炬燵に入らせ、部屋に散らかったものを片付ける。検温を済ませてから朝食を運び、一段落。

台所に戻ると、なかなか食べ終わらない実歩の口に残った物を放り込み、寛大には歯磨きをするように言う。息子が出勤し、夫が立ち当番に出かけている間に、寛大と実歩に着替えをさせ、連絡帳に記入をし、義母の部屋に行って朝食の盆を下げる。

当番を終えて帰ってきた夫が寛大と実歩を保育所に送り、私は義母とデイサービスのお迎えを待つ。義母をデイサービスに送るとようやく一息つく。パソコンに向かって点訳をすると、肩の力が抜ける。いつもしていることをするというのが、こんなに落ち着くものなのか。一時間ほど点訳してから娘のところに向かう。娘は相変わらずよくしゃべり、赤ん坊はずっと眠ったままだった。

帰って、一人昼食を摂った後、睡魔が襲ってきて、少しだけ眠った。買い出しをし、夕食の下ごしらえをしてから寛大と実歩を迎え、その足で産科医院へ。寛大は「おかあちゃん」と近寄っていくが、実歩は近づこうとしない。この光景はあの時と同じだ。実歩が産まれた際、寛大も母親に近寄ろうとしなかったのだ。いつもの母親と別の存在に見えるのだろうか。しばらくして、忠ちゃんが来たが、実歩の表情は固まったままだった。

30代フリーター　やあ、ジイさん。バイデンの大統領就任を阻もうと連邦議会を占拠したトランプ支持者らに世界中から非難が集まっている。

年金生活者　議会の占拠という「戦術」そのものを「民主主義に反する」といった理由で非難する気に私はならない。60年安保で国会に突入した学生たちに共感を覚えたひとりとして、大学をバリケード封鎖した当事者のひとりとして、そして台湾の立法院を占拠した学生たちを支持したひとりとして、そう思う。

この事件について藤沢数希という覆面作家が「さすが、民主主義の国や」とツイートしていた。「民主主義の国」でない中国や北朝鮮では、こんなことは起こり得ない。北京の人民大会堂や平壌の万寿台議事堂がデモ隊に占拠される光景は空想すらできない。

60年ほど前に学生たちが国会構内で集会を開くことができたのも、半世紀前に全共闘の学生たちが大学に籠城できたのも、7年足らず前に台湾の学生たちが立法院を占拠できたのも、そしてトランプ支持者らが連邦議会になだれ込むことができたのも、議会や大学という公共の施設が独裁者のものではなく、国民のものだという民主制の理念があったからだ。だから警備も中国などよりはるかにゆるかった。

つまりどの場合も民主主義が機能していた。ただし、それは十全なものではなく、形骸化の危険をはらむ不具合を起こしており、それが「非民主的」な物理力の行使を誘発した。60年安保では与党による強行採決が国民の怒りを買った。大学では民主主義を説教する教員と学生との間の厳然たる身分格差が全共闘の「大学解体」運動を広げた。台湾では与党国民党による一方的な審議打ち切りが学生たちを反発させた。

30代　アメリカの民主主義にはどんな不具合があるんだ。

年金　フランスの歴史人口学者エマニュエル・トッドが言っている。「ニューヨーク、ワシントン、ロサンゼルス、サンフランシスコなど大都市のメディアや大学のエリートは、トランプ支持者を『学歴がない』『教養がない』と馬鹿にし、ヒラリー本人も、『嘆かわしい人々（deplorable）』とまで言いました」（「それでも私はトランプ再選を望む」、『文藝春秋』２０２０年11月号）

トランプは4年前の大統領就任演説で「私たちは、首都ワシントンから権力を移し、国民の皆さんに戻すのです」と語った。富の稀少性の縮減によって国家から個人、企業、国家間システムへの権力の分散が進む中で、分散した権力を手にしたアメリカ国民は、それにふさわしい処遇を求めているのに、それをワシントンのエスタブリッシュメントが阻んでいる。トランプは終始そのことを別の言葉で訴えて熱狂的な支持者を獲得した。

30代　ツイッター社はトランプのアカウントを永久停止した。議会占拠事件のあと、彼は「私に投票してくれた偉大な米国の愛国者たちは、将来にわたって巨大な声を持つ」「大統領就任式には出席しない」とツイートしており、同社は「米国内の緊張状態などを考慮し、この二つのツイートが、暴力の誘発を含め人々をさらに動員するおそれがある」とする声明を出した（1月10日朝日新聞朝刊）。

年金　「永久」はいくらなんでもやり過ぎだ。ツイッター内での死刑宣告に等しい。暴力をそそのかすような具体的な文言もないのに、暴力誘発の恐れと決めつけるのは、近代社会の司法の標準から逸脱しており、香港国家安全維持法による民主派の弾圧さえ連想させる。

30代　民間企業を国家権力と同列には論じられない。

年金　ツイッターはすでに世界中の多くの人々にとって日常的に使用するインフラと化しており、公共性を帯びている。それどころか、ドイツの哲学者マルクス・ガブリエルなどはこのＳＮＳを「新しい全体主義」の主体とみなしている。彼は次のように語っている（２０２０年９月２日朝日新聞デジタル）。

「私は全体主義の特徴の一つを、公的な領域と私的な領域の区別の喪失として考えています。20世紀の歴史を振り返れば、日本の過去もそうでしたが、全体主義化すると、国家が私的領域を破壊していった。私的領域とは、より分かりやすく言えば『個人の内心』ですね。国家は監視を通じてそれを探り、統制しようとしました。一方、現代は違います。監視・統制の主体は政府ではなく、グーグルやツイッターなどに代表されるテクノロジー企業です」

「私たちはいま、ＳＮＳなどで私的な情報を自らオンラインに載せ、テクノロジー企業がその情報に基づいて支配を進めています。しかも自発的に私たちは情報を提供しています。一方、国家はこうした企業に対して規制をしようとしても手をこまねいている」

30代　ＧＡＦＡやツイッター社に代表される巨大ＩＴ企業が「新しい全体主義」の主体だとしたら、それに対抗できる方法はあるだろうか。

年金　絶対王政を倒した市民革命に相当するようなことがネット上で起きるのか。市民社会を代表する議会が官僚組織に対抗する装置として国家の中に誕生したように、巨大ＩＴ企業に対抗する仕組みが生まれるか。答えはガブリエルも出していない。

ニュース日記　769

中村　礼治

トランプがあぶり出したもの